

ジロドゥ戯曲全集 第四卷

定価 七〇〇円

一九五八年二月二十五日初版発行
一九六五年九月一日再版発行

訳者 © 鬼頭哲人
原千代海

寺川博

発行者 草野貞之

発行所 株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(四)七八一一(代)
振替東京三三二二八

堀内印刷・大光堂製本

シロド
ウ
戯曲全集
第四卷

Titres originaux :
SUPPLÉMENT AU VOYAGE DE COOK (1937)
L'IMPROMPTU DE PARIS (1937)
et
ÉLECTRE (1937)
Auteur :
JEAN GIRAUDOUX
Editeur :
BERNARD GRASSET

Original copyright by Jean-Pierre Giraudoux, Paris
Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokio

分口二全集 2

内村直也・鈴木力衛 共編



白水社

目次

クック船長航海異聞……………原千代海訳　七

バリ即興劇……………寺川博訳　七

エレクトル……………鬼頭哲人訳　一〇

解説……………三〇

クツク船長航海異聞

一幕

原千代海訳

登場人物

副長

ソランダー

シュリヴァン

バンクス氏

バンクス夫人

ヴァラオ

ウットウルウ

ウットウルウの弟

若い叔父

マタミユア

アマルウラ

ポマレトウタ

タヒリリ

ヴァイチュルウ

土人 1、2、3

オタヒチ島 日没前。

芝生の空地。

第一場 副長。バンクス氏（クック探險隊附博物学者）。

ソランダー（水夫長）。シュリバン（鼓手）。

あちこちから土人たちが集まつて来る。合図の太鼓が鳴り渡るうちに、幕あがる。

副長 さて、隊長の布告！

（短かく太鼓の連打）

副長 （読んで）オタヒチ島の住民諸君。国王の御用船インデヴァール号の指揮官たる余、隊長クックは、ここに一七六九年四月九日、船中において、余が決意したところを諸君にお伝えする。余はかつてウォリス、ヘブリデスの諸島に寄港したが、その際、余はあまりに上陸を急いだため、まず、イギリス乗組員の一人をして、ポリネシア人民諸君と打合せさせておくのを怠った。これは、まことに遺憾であつて、あまりにも性急な婦人諸君の歓迎と、我々が着用している制服のボタンめがけて殺到する男子諸君の熱狂は、自然、船員と島民の交歓に際しては、まず、然るべき人物が諸君の族長たちと折衝し、而うして諸君に、つまり、これなくしては文明と言い得ないところの神聖なる原理について、簡単な手ほどきをしておく

必要があるということを余に考えさせたのである。ここに於て、余は、今回、探險隊附博物学者兼剝製標本製作家たるミスター・パンクスをその目的のために選任した。同氏の道德的感化力は、自然科学者としての同氏の才能に決して劣るものではない。同氏がパーミンガム教会堂の次席執事たることは、即ち、これを証明するものである。まず、同氏が、我々に先んじて、全き一夜をこの島に過ごすであらう。さらば、余は、前回の航海者たちにより、優秀なる人物として折紙をつけられた諸君の族長ウットゥルゥに望む。宿舎、給水はもとより、明日、国王陛下の船員上陸に欠くべからざる秩序を保証すべき一般的法則の消化について、その指導に従って貰いたい。

(太鼓連打)

ソランダー　ウットゥルゥ酋長はいるかね？

土人　ウットゥルゥ酋長はもぐってるよ。真珠を採りに入る時間だからね。夕方は、鱧もおとなしいんでな。

副長　誰か行つて、すぐ連れて来る。太平洋の海の底より、ミスター・パンクスの話の中から、もっと沢山の真珠が採れる。

パンクス氏　御冗談を、副長さん！

副長　ところで、ミスター・パンクス、あんたの来たことを、もったいつけて島民たちに知らせるには、どんなことをやったらうまく行くとお思いますかね？

バンクス氏　ダビデの怒りの讚美歌はどうでしょう？　私は、ちよいとテノールがいます

し、シュリヴァンが太鼓でベースをやってくれますとな。旧約聖書の讚美歌に太鼓を使うことは、司教さんからも許されてますんで。

副長　それなら、もっといい手がありますよ、ミスター・バンクス。支度はいいか、ソランダー？

ソランダー　ようがす、副長。

副長　太鼓だ、シュリヴァン！

（太鼓の連打。ソランダーが塚に上る）

ソランダー　さあ、さあ、オタヒチの住民諸君、お目とめて、水夫長ソランダーをごろうじろ！　ポケットにはなんにもない！　手もからっぽ！　はい、胸を叩く、お腹を叩く！　何も出ない！　隠したものはなんにもない、はいっ！　（ソランダーは手中の卵を示す）あらわれましるは一個の卵！　この土地の卵にあらず、鱈やカ、モノハ、シの卵ではない。わしが国さでニワトコの木から生れたるを以てニワトリと名づけられたる驚くべき鳥の卵！　はい、太腿からごらんの通り！　はい、眼から取り出す！　水夫長ソランダーが眼から生み出し、腿から生み出す、オタヒチの島民諸君！　だが、驚くには当らない。こんな奇蹟はお茶の子さいさい、珍らしくないという御人があったら、この口から何が飛び出すか、さあ、今度こそは、とっくりと眼をすえてよくごろうじろ。イギリスの船乗りが、普通に口から吐き出せる

のは、そもそも何？ 国王陛下の司厨長が流し込んだ、怪しげなラードでいためたコチョコチの空豆！ だが、ソランダーはわけが違う。この口から取り出すのは蝶々、三毛猫ならぬ三毛兎、而うして最後のはなむけに、我らが敬愛する国母陛下の御義妹、フェリシー・シャアロット女王殿下が等身大の御肖像。

（太鼓連打。島民たちが、黙りこくって見守っている）

副長 駄目だよ、ソランダー。

ソランダー どうして平気なんでしょう？ マゼラン群島じゃ、奴ら、卵の力であっしの足をなめたり、兎のせいで、あっしを崇拜したんですがね。

バンクス氏 （土人の一人に） いっこう驚かないようだね、ええ、君？

土人 驚いてもええが、驚くこともない。

バンクス氏 どういう意味だね？

土人 1 お前さんたちが人間なら、そりゃ、驚く。お前さんたちが神様なら、驚くことはない。腿から卵生み出したり、口から蝶々吐き出したり、神様にや朝飯前だからね。おれたちんとこの神様だって、ソランダーさんよりずっと力があつた。神様方のお生みなさる卵は、一番小っちゃい奴でも、この島よりずっとでかいからね。蝶々が飛び出しゃ、飛び去るまで、一番小さい奴でもオタヒチ島は三日間、羽根の下だ。だが、ソランダーさんが神様でないっていうんなら、話は別だ！

バンクス氏 ソランダーは人間だよ、嘘は言わん。

土人1 ほんとかね！ イギリス万歳！

（熱狂的な拍手）

土人2 イギリス人は、腿や眼玉から卵を産み出す！ 人間を尊重してるぞ！

土人3 そら、急いでお迎えだ！

（群集は、熱狂的な興奮に陥る。あるものは簡単な土人小屋を組立てる。またあるものは、大木の根元に駆け寄って、なんともわけのわからない仕事に熱中する）

副長 いったい、どうしたというんだ！ ねえ、ミスター・バンクス、ウットウルウがやっ

て来るまでに、この騒ぎはいつたいどうしたのか、奴らに聞いてみたらよくはないですか？

そうすりゃ、前以て、土人の心持が、ちったああんたにもわかるかもしれないよ。

バンクス氏 そりゃいい、副長さん……。ねえ、君、君たちの仲間はあそこで何をしてるの？

マタミュー （枕を打っている土人たちを指しながら） お前さんが今夜泊るところこしらえてるの

だ、ミスター・バンクス。

バンクス氏 あの小屋かね、吹きさらしの？

マタミュー 一番、向きがいいよ、ミスター・バンクス。ナディナの方を向いてるからな、異

人さんが眠ってる間に、袋鼠にならないように、星が番をしてくれるのよ。

副長 なかなか実用的だ。

マタミユア

船員さんたちには、みんなめいめいが虫なり、魚なり、草なりにならないよう

に、気をつけて、ちゃんとしたのを建ててやるよ。どんな動物に一番なりそうだね、ミスタ

１・ソランダー？

ソランダー

わしかね？ ムカデだ。

マタミユア

パヒラオの方に向けてやるよ。そうすりゃ、スナノミ虫にだってなるまいから

な。

ソランダー

そいつはありがてえ。

バンクス氏

ところで、何を敷いて寝るんだね？ ベッドは？

マタミユア

ベッド？ ベッドってなんだね？ おれたちは、土の上にじかに寝るよ。

バンクス氏

じゃ、病気になるたら？

マタミユア

病気でも、やっぱり、じかに寝てるよ、ミスター・バンクス。

バンクス氏

じゃ、死んだら？

マタミユア

つまらんこと聞くもんでない、ミスター・バンクス。この島では、死ぬ者はない

よ。近所の、ほかの島では、死ぬ。おれたちは死なない。死ぬふりをするのだ。お前さんは、それを考え違いしてるのだ。死にそうになつてわめいたり、もがいたり、身体が冷めなくなつちまったりすることだつてあるが、おれたちは、生れて来る最初の子供になつて、また、生き返つて来るのだ。この辺の島じゃ、みんなよく知つてることだ。おれたちの島にや、

途方もない、いいことが二つある。イギリスの船員さんも、その御利益が受けられるよ。乳の出る木の乳はしょっぱいし、ここじゃ、誰も不死身なのだ。

バンクス氏

じゃ、子供もやっぱり、土の上でじかに産むの？

マタミユア

きまつてるよ、ミスター・バンクス。赤ん坊を餌食にして生きてる悪魔は、せいぜい一メートルより、口が下にさげられないのだ。脚の割に、めっぽう首が短かいからね。

バンクス氏

膝をつけばいいじゃないか。(土人たち、どっと笑う) そんなに変なことを言った

かね？

マタミユア

それは出来ない、ミスター・バンクス。悪魔の膝は継ぎもんだ。

バンクス氏

かりにこの膝が継ぎもので、僕がどんなに餌をほしがって、地上すれすれに口を持って行こうとしても、持って行けないなんて、そんなことを僕に信じさせようたって、そりゃ駄目だよ！ 寝ころがって、腹ばいに食いさえすりゃわけないんだからね。(どっという笑い)

マタミユア

悪魔の胴っぱらは火だからね、腹んばいになぞなった日にゃ、みんな黒焦げになっちゃいますよ。それで大火事が起るのだ。

バンクス氏

そんなら、黒焦げになった奴を食うまでさ！ そうすりゃ文句はないだろう！ もっとも、そいつあ行儀のいいことじゃないがね！

マタミユア

行儀がいいってのは、なんのことだね、ミスター・バンクス？